

長い間榮えたものである。此故に月吉層が中新世であり、其下部ではない事だけが考へ得るのである。又デスモスチラスは最近米國に於いては從來よりも概して古く考へられ一種は漸新世に及ぶ事が判明した。

此の如く考へて來ると平牧、戸狩兩層（後者は月吉層を含むものとして）は時代が略同じと言ふ事になる。平牧層の主部は白色の凝灰岩で戸狩層も同様であり、兩層の中村層に對する關係も似たものがある。戸狩層は土岐の凹地に沈積し、平牧層は可兒の凹地に沈積した。兩凹地の間には古生層と花崗岩の丘陵があつて境となり、戸狩、平牧兩層は重層せず、同期異相の沈積なるを否とする理由は見出し難い。

以上の記載考説はなほ推敲の餘地があるは勿論で、一應豫報として發表したのであるから幸にして何等かの教示を得たる上改めて本報文を草したいと思つてゐる。

筑紫平野東部の村落立地

西 龜 正 夫

筑紫平野の東部は三個の斷崖線によつて限られた三角形の地域で、北は筑豊山塊、南は水繩

山塊、西は脊振山地である。水繩山塊の北縁は二十度以上の急傾斜を有する標式的斷層崖で

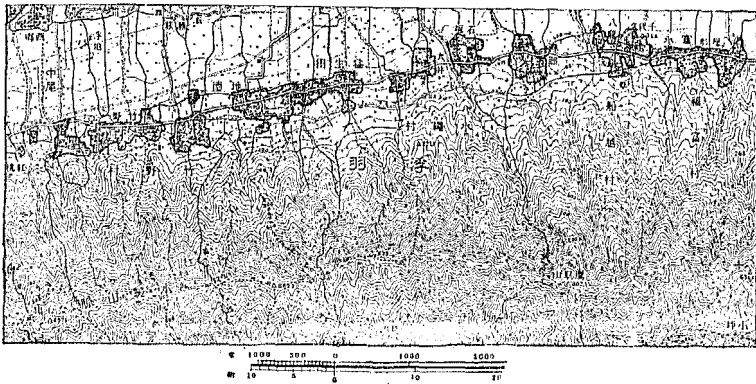
崖下には多くの扇狀地が併列してゐる。平野は筑後川の本支流によつて冲積せられたものであるが、近代に於て地盤の隆起があつたために更に侵蝕が進み、ために山地の縁邊附近には所々に洪積層の臺地を見るのみならず、平野の中央にあつても、河流は著しく嵌入して、數多のテールランドに分たれてゐる。現在洪積臺地の外は殆ど悉く水田となつてゐるので、地圖上ではこの微地形は讀みとれないが、灌漑のために極めて大規模の工事を必要としたのは全くこの河道嵌入のためである。

さてこの地域に於ける村落立地の模様を見ると、地形と交通線とに支配せられて種々の特相をあらはしてゐる。今その二三について略述しよう。

斷層崖下の聚落列

水繩山脈の斷層崖下に一列の聚落がずらりと並んでゐる。東は吉井町の東南から西は久留米市の東部三井町まで、約二十二軒に亘つて殆ど

第一圖



一直線に三四十個の村落があつて、個々の村落間是最も遠くて七八百米近いものは遂に互に相接觸してゐる。第一圖はその中央部約十軒の間を示したものの

であるが、どの聚落もあまり甲乙の無い大きさを有し、且何れも同じ様式の疎集村落であることがよくわかる。これ等の村落は何れも斷層崖下の扇の上に立つてゐて、附近には時として圓礫を含む洪積層があつたり、或は一種泥炭様の堆積物を見出したこともあつたが、多くはあまり稜角のとれない礫と土砂との堆積から成つてゐる。水繩村石垣の觀音寺には俗に隕石と名づけられた花崗岩の大塊があるが、恐らくは崖上から崩れ落ちたために隕石の名を得たのではあるまいか。

東部殊に福富村の東方では背後にやゝ深い谷があるために、扇も最も大きく發達してゐるが、その他の部分は斷崖の直下にあつて著しい谷が出来てゐないために、幕狀崖錐の形をなして個々の扇を區別することは困難である。そして聚落の存在するのは概してその扇の頂點に近い部分で、扇の末端には一戸の民家も見出し難い程である。

これ等の村落は何れも農を主業とし、その北方に擴がる冲積平原上の水田を耕作するのみで背後の山地は殆ど自然のまゝに放任して利用の道を講じて居ない。畑は僅かに宅地の周圍に存在するのみで、多くは自家用の野菜を栽培し、森部の蜜柑がやゝその名を知られてゐる以外に特産物は無い。

こゝに一條の道路が東西に走つてこれ等の聚落を珠數の如く連ねてゐることは注意すべき事實である。この道路はずつと古代には久留米方面から日田方面に向ふ主要街道であつたらしいが、戰國時代にはもつと北方巨瀬川に近い處に大友氏によつて宗麟道なるものが作られたと云ひ、現時は更にその北方に縣道を通じてゐるのである。而して現時に於てはこれ等聚落を連ねる道路は何等交通幹線としての機能を發揮することなく、たゞ僅かに各聚落を連ねる部分的交通路たるに止まつてゐる。

個々の家はこの道路とは何等の關係なく建て

られてゐる。家の向きは概ね山を前にした南向きで、道路の南側に沿ふものは大抵その道路に背をむけてゐる。道路の北側にあつて道路に面する家も、多くは直接道路に接しないで廣い前庭と生垣とを有するのである。

交通幹線上の聚落

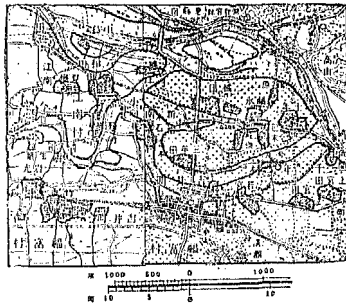
近代に於て築成せられ、更に明治の末年に改修せられた久留米・日田間の縣道に沿ふては、吉井・田主丸の二市街を始めとして多數の聚落がやはり珠數つなぎとなつてゐる。これ等の聚落は前記二市街を除けば概ね農が主業であつて、必ずしも交通線のために發達したとのみは考へられないものが多いが、併し農村であつても道路に沿ふて建つ家は商業を兼營するものが多く自ら附近村落の經濟的一小中心となつたり、飲食店、自轉車修繕所等があつて交通聚落としての僅かな特徴を認め得るものも少くない。又西部にあつては農業と云つても果樹苗木類を栽培するものが多いが、これもその道路に沿うて輕

便鐵道（現在は省線）が出來たために發達したものである。平野の北邊、惠蘇宿から甘木を経て二日市に至る交通線上にも、これと同様の聚落列を見ることが出来る。

小臺地上的聚落

水繩の斷層崖から流下する川は、殆ど悉く天井川をなしてその堆積作用の盛なことを示してゐるが、これ等の並行して北流するコンセメントの川は、巨瀬川のサブセメント流によつて悉く西に捉へ去られて、巨瀬川以北の地は全然筑後川本流の自由なる蛇行に委せられてゐる。この筑後川はこの附近に於て著しく回春して自己の冲積物を再び自ら侵蝕しつゝある。而してその流路は次第に北に向つて移つて行きつゝある様である。その理由は兎も角として現在の河道以北には舊河道らしいものは殆ど見られないのに、その南には夥しい舊河道があつて現在も多く細流を通じ、その兩岸には最も早く開けた水田があつて俚稱「古田」と呼ばれてゐる。

第二圖



これ等の古田は洪水に際しては必ず侵水すると云つてよい程で、そこには殆ど聚落は見られない。千年村役場附近の如く稀にこの河道の部に聚落の存することもあるが、年々の水害に困り果てゝ居るのは事實である。

今吉井町附近についてこの舊河道を復舊して示したものは第二圖である。これから西は北野善導寺附近まで殆ど同様の地形であるが、調査が幾分疎漏であるのでこゝには出さなかつた。が兎も角もこの地域は冲積平野が多數の小さな臺地に區切られてゐるのである。それは波狀と云つても當らないが、鹿子絞の形と云つたらどうであらうか。地名に中島・高島・唐島・金島・床島

筑紫平野東部の村落立地

藤島など島と名のつくものが非常に多いが、それは實際に於て島の形をしてゐることが多く、洪水の時には文字通りの島になつて他の村落と全く交通の遮斷せられることが多い。千年村角間、江南村中島等にある筑後川の堤防は、最も堅固に築造せられてゐるにも拘はらず、屢々決潰の慘事を來して多くの島をつくるのである。

そこで聚落がすべてこの舊河道を避けてゐることは當然の話である。寛文年間五庄屋の献身的努力によつて大水道が開設せられてから、このあたりの臺地上は悉く水田となり、水の乗らない畑地は極めて少くなつて使ひ水にも事缺かぬ様になつたが、それ以前はもとより河跡のみが水田地帯で、臺地上は畑と雜木林であり、井戸を掘れば飲料水は得られたにしても、小川の流れてゐる附近が住みよいには相違ないから、聚落は屢々その臺地と河跡との境界に近い所に出來た。併しそれは何も關東平野で見る様に急斜面を宅地に利用するといふわけでは無い。臺

地と河跡底との比較高度は通例三米から十米までであるから、その間に水田や畑に利用し難い様な經過地域は無いのである。そして聚落は臺地上にあつて殆ど低地には下つて居ない。

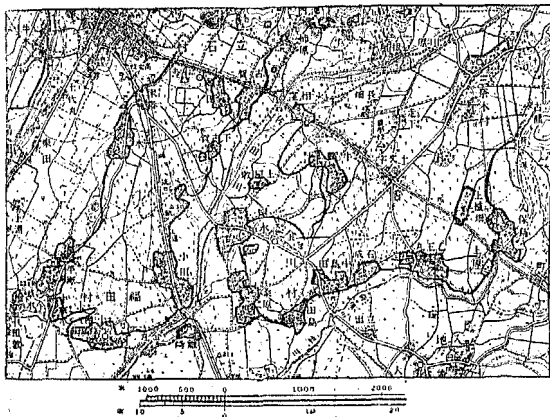
洪積臺地縁邊の聚落

洪積層の臺地は筑後川の本流以北に著しく發達して居て、南部では平野の東端山春村附近に稍廣いものが見られるだけである。これは平野の南部が陷落最も甚しくて深い海になつてゐたからであらうし、又北方の山塊は緩斜して分水界が遠いので流下物質も多かつたからでもある。兎に角甘木町を中心としてその南東方から、西方脊振山塊に接するまでの間に廣く分布せられて居て、その表面は多く小松の林となり時として楡畑となり又野菜畑となつてゐるに過ぎない。随つて水田と云へば河岸の低地か又は山地に接して灌漑の便ある部分に限られてゐる耕地の全面積に對する割合が少いから、人口密度も南部に比べると疎であり、聚落も亦少いの

である。

この地域の聚落は多くはその洪積臺地の縁邊に立つてゐる。河畔の低地は多く水田場であるが、それは南部の様に洪水の憂が甚しくは無い何となれば川が何れも小さいからである。随つ

第三圖



てそこにも聚落は營まれてゐる。又一面には臺地の中央にも聚落はある。併しそれ等は交通線

に沿ふてゐるといふ様な特殊の場合が多く、然らざれば小さい聚落であるか又は二次的の新しい出村であつたりする。そして主要な聚落は皆臺地の縁邊、それは或は臺地上であつたり、或は低地に下つて居たり、或は又兩者に跨つてゐ

佐賀縣の自然地理 (二)

たりするが、何れにしてもその境界線に近い所に存在するのである。これは或は關東平野の一部に於けるものと相似た現象であるかも知れない。この洪積臺地上では井戸を掘つても容易に飲料水の得られない場合が多い。

堀 米 次

一、脊 振 地 壘

扱て此の脊振―天山地區を地形的にながめるならば、大體二部分に分つことが出来る。それは脊振地壘と天山々塊の二つである。次に其の各々について少し詳しく考察してみやう。

抑も此處で脊振地壘と言へるものは、西は東松浦郡濱崎町の東北部たる福岡縣境附近に其端を發して、東方に約二十五軒を延びたる後、これは東南に屈曲すること約二十軒、三養基郡中

原村に終るところの弧狀をなす山脈を言へるものである。此の山脈は一つの地壘山脈であつて其南を劃する斷層線は、先づ玉島川の谷を溯り羽金山(海拔約九〇〇米)の南部の天山々塊と接續するところの鞍部(海拔約四五二米)を越える。そして、それは嘉瀬川上流たる川上川の谷に出で、月越、麻名古、下無津呂、落合、池田の諸部落を経て城原川の上流たる脊振村を過ぎて仁比山に至る一線である。此の斷層線は東南